



TITLE:

サイボーグ生命倫理

AUTHOR(S):

西村, 正秀

CITATION:

西村, 正秀. サイボーグ生命倫理. 京都大学文学部哲学研究室紀要 2006, 9: 21-33

ISSUE DATE:

2006-12-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/24216>

RIGHT:

サイボーグ生命倫理

西村正秀

「サイボーグ(cyborg)」とは、cybernetic organismの略であり、機械と生物のハイブリッドとして定義される。サイボーグが思想界においてもはやされだしたのは、1985年にダナ・ハラウェイが雑誌『社会主義評論』において発表した論文「サイボーグ宣言」からであろう¹。この論文は、機械と生物のハイブリッドとしてのサイボーグを、西欧におけるジェンダー問題の根源であった「自然と文化」の二分法を破壊する理想像と見なす、いわゆる「サイボーグ・フェミニズム」を展開したものである。このサイボーグ・フェミニズムのアイデアは、「女性」にだけではなく、社会的抑圧がもとでアイデンティティに混乱が来たされた全ての者に対して適用可能な倫理的含意を有していると考えられる。本稿の目的は、そのようなサイボーグ倫理の一形態として、外科手術による身体改造によってアイデンティティの混乱を余儀なくされた者に対する「サイボーグ生命倫理」を紹介した上で、その議論を批判的に検討することである。

1. サイボーグ・フェミニズム

サイボーグ生命倫理の議論に入る前に、予備的考察として、ハラウェイのサイボーグ・フェミニズムを、簡単に振り返っておこう。

ハラウェイの思想は、1960年代後半から始まり、80年代まで欧米で攻勢を極めた、第二波フェミニズムの一形態である「ラディカル・フェミニズム」の影響と反省の上に提出されたものである。第二次世界大戦後、物質的に豊かな生活が実現された1950年代アメリカでは、女性は家に留まり、家事と子育てに従事すべきであるという社会風潮が蔓延していた。そのような女性に対するジェンダー的抑圧のルーツを分析し、覆すことを目的としたのがラディカル・フェミニズム運動である。ハラウェイは、この運動に対して一定の理解を示す一方で、一部のラディカル・フェミニズムが含意する「本質主義」的主張に対しては、激しく反意を示していた²。ラディカル・フェミニズムは多様な形で実現されたが、その内の幾つかは、ラディカル・フェミニズムこそが、新しいジェンダーとアイデンティティの基盤を提供するという主張を含んでいた。このような女性の本質の固定化を、ハラウェイは断固として拒絶したのである。そのような彼女にとって、旧来の「女性」像を破壊するためには、女性は、男性優位主義的な社会によって汚染された表現方法を用いるのでは

なく、自分の身体を自分自身の言葉で「書くこと」によって表現しなければならない。このような動機を背景として登場したのが、1985年の「サイボーグ宣言」である。

「サイボーグ宣言」は、機械と生物のハイブリッドであるサイボーグを、ジェンダーの背後にある様々な悪しき二分法を超越する、新しい身体の変換として用いた試論である。ここで重要なのは、変換としてのサイボーグが果たしうる機能である。我々は、この機能を、ハラウェイによるサイボーグの定義から読み取ることができる。

「サイボーグとはサイバネティックな生物(organism)であり、機械と生物のハイブリッドであり、フィクションの生き物であると同時に、社会的実在の生き物でもある」³。

この定義は、サイボーグを、三つの意味で両義的なものとして描いている。まず、サイボーグは、サイバネティックな生物、すなわち、通信工学と制御工学によって産み出された生物であり、共同体との関わりを本質的に含んだ個体である。第二に、サイボーグは、機械と人間とのハイブリッドである。第三に、サイボーグは、フィクションとファクト（事実）のハイブリッドでもある。元来、サイボーグとは、宇宙軍事産業とサイエンス・フィクションにおいて、それぞれ発展させられた概念である。実際、ハラウェイがサイボーグを説明するときにも、ジョアナ・ラス、サミュエル・ディレイニー、ジョン・ヴァーリィ、ジェイムズ・ティプトリー・ジュニアなどのフェミニストSF作家による作品群が引き合いに出されている。だが、その一方で、サイボーグは、現実社会に存在しているファクトでもある。例えば、ハラウェイも指摘するように、現代医療においては、心臓にペースメーカーを埋め込んだ人や義手をつけた人など、様々なサイボーグが溢れ返っている。また、その他にも、我々の身の回りには、自動車やコンピューターを使用する人が、「ローテク・サイボーグ」として、日常的に存在している⁴。

以上の両義性は、サイボーグを、アイデンティティや身体に関して、「両立不可能なものを、それらは共に必要であり真であるという理由で、一緒に抱合している」存在者として特徴付ける⁵。サイボーグは、単なる共同体と個体、機械と生物、あるいは、フィクションとファクトを寄せ集めたものではなく、両者の「ハイブリッド」である。すなわち、サイボーグは、様々な相反する契機を含んでいるが、それら個々の契機とは、もはや、全く別の種として存在しているのである。さらに、ハラウェイによれば、このようなハイブリッドとしてのサイボーグは、「コスモス[宇宙・秩序]を回想することはない」⁶。サイボーグは、既に相反する契機を自分の中に抱合しているがゆえに、自分とは異質なものと自分の起源との一体化を希求することはないのである。起源や秩序への回帰志向を持たないサイボー

グは、言わば、西欧社会から産み出されながら、その西欧社会という親を顧みることのない、不義理な「私生児」なのである⁷。

この「両立不可能なものを一緒に抱合し」、「自らの起源を顧みない」サイボーグに付与されるのは、社会的に構成された「女性」というカテゴリーを超越する機能である。ハラウェイは、「女性」というカテゴリーを産み出した元凶は、伝統的な西欧的二元論であると指摘する。この二元論は、「女性、有色人種、自然、労働者、動物を支配するための論理と実践に呼応するもの」であり、そこでは、他者は、支配者が自分を映し出すものとしてのみ存在が許される、抑圧された存在者として定立される⁸。そのような二元論の例としては、「自己と他者」、「精神と肉体」など様々なものがあるが、その中で、ジェンダー問題にとって最も決定的な役割を果たしたのは、「自然と文化」の二分法である。西欧科学と西欧政治学は、「自然を搾取するもの」として文化を定立し、その上で、男性を文化に、女性を自然に、それぞれ重ね合わせることによって、支配する男性と抑圧される女性というジェンダーを産出してきた。だが、ハイブリッドとしてのサイボーグは、このような二分法から逸脱し、相反する契機を抱合することによって、それらの境界線を脱構築する。ハラウェイによれば、この脱構築こそが、ジェンダー無き世界の可能性を開くのである。

このような、メタファーとしてのサイボーグが果たす機能から、サイボーグ・フェミニズムが導き出す教訓は、「ハイブリッドとしてのサイボーグ的視点に立つこと」の重要性である。我々は、自分自身をサイボーグとしてイメージすることによって、初めて、ジェンダーという社会的抑圧から解放されるのであり、その結果、自分の身体や経験を、自分の言葉で「書くこと」が可能となる。ハラウェイにとっての至上命題は、「二十世紀後半において、女性の経験と見なされてきたものを変更する」ことであったが、その目標は、混乱したアイデンティティを持つ自分自身を、積極的に受容することによってのみ、達成される⁹。そして、その手助けとなるのが「サイボーグ」というメタファーなのである。

2. 外科手術が引き起こすアイデンティティ問題

サイボーグ・フェミニズムは、男性優位主義社会において抑圧された「女性」というジェンダー問題の解決法として提出されたものであった。このアイデアは、「女性」だけではなく、社会的抑圧を受けることによって、アイデンティティの混乱を来している他の存在者に対しても、広く適用可能なものであると考えられる。本節と次節では、その適用例として、アーサー・フランクによる論文「外科手術による身体改造と利他的個人主義：サイボーグ倫理と方法の一例」(2003)を紹介する¹⁰。この論文は、外科手術による身体改造が患者に引き起こす、アイデンティティの混乱という問題の解決方法に、サイボーグ・フェ

ミニズムのアイデアを援用したものであり、言わば、「サイボーグ生命倫理」という新しい分野を示唆するものである。

フランクの分析の対象は、外科手術によって自己のアイデンティティに混乱が生じた子供達である。より具体的に言えば、フランクは、このような子供達が発生するケースとして、次の三つの外科手術を取り上げる¹¹。

- (a) 軟骨無形成症、あるいは、遺伝的小人症を患う子供に対する、脚や腕を長くする外科手術。
- (b) 両性具有など、異常生殖器を持つ子供に対する外科手術。
- (c) ダウン症などを患う子供に対する頭蓋顎顔面外科手術。

子供達がこれらの手術を受ける理由は複雑である。第一に、小人症の人が脚を伸ばすことによって、健常者向けの車を運転できるようになることなど、これらの手術には身体的機能を獲得するという理由がある。第二に、これらの手術には、社会的期待に応えるという理由がある。例えば、(b)の異常生殖器を整形することには、「男性は、しかじかの形の生殖器を持っているべきである」といった、ジェンダー・バイアスの掛かった社会的期待に応えるという目的を持っている。(a)~(c)のいずれのケースも、明示的に、あるいは、黙示的に、「社会の批判に晒されない」という目的を携えているのである。

このような複雑な要因から、これらの手術は、「患者が手術を受ける機会は、経済的な問題を含めて、平等、かつ、公正に分配されているのか」、「手術が患者の人生をどのように変更するか予測できない場合に、インフォームド・コンセントをどのように行えばよいのか」といった、様々な倫理的問題を伴っている¹²。だが、フランクが考察するのは、これら個々の倫理的問題ではない。むしろ、彼が問題視するのは、そもそも、これらの問題を産み出してしまう社会的条件である。彼の目的は、この条件を分析することによって、患者である子供達が、これらの問題に悩まされないようにするためには、どのような倫理が必要となるのかという点を模索することなのである。

この目的を達成するためにフランクが用いたのは、現象学にルーツを持った「質的研究 (qualitative research)」という方法である。質的研究とは、数量分析に頼る実証主義的方法論と対立する方法論であり、現在、教育学や心理学や看護学などのフィールド・ワークを用いる分野において、広く採用されている。この方法のポイントは、既存の仮説や方法論を「かっこ入れ」して、研究対象となる人の声を、できるだけその人を取り巻く社会的・文化的環境において理解することに努めることにある。フランクは、この方法を用いて、外

科手術を受けた子供達自身が語る言葉を調べ、子供達が手術に対して、どのような感情を抱いているのかを調査したのである。

この研究によって明らかにされたのは、子供達は、手術を受ける際に、「利他的個人主義者(altruistic individualists)」として行為しているということであった¹³。「利他的個人主義」とは、社会学者・哲学者であるウルリッヒ・ベックが提唱した、行為決定に関するモデルの一つである。このモデルによれば、利他的個人主義者として行為する者は、自己の行為を、それによって獲得される自分の利益とリスクを個人主義的に計算すると同時に、自分が属する共同体などの「他者」への関心をも示すような仕方で行う。別の言い方をすれば、利他的個人主義においては、利己主義は、常に利他主義によって補完されるのである。フランクによれば、(a)と(b)の手術を受けた子供達に対する質的調査は、それらの子供達が、一見、他者の関心を考慮しないような仕方で行う行為決定をしているが、実は、依然として、利他的個人主義者として行為していることを示している¹⁴。例えば、(a)の手術を話題としたインターネット・チャットを調べたところ、そこには、次のような書き込みがなされており、それは、チャット・グループの参加者に共有されていた。

「しかし、結局のところ、脚を長くする手術を受けるかどうかは、各人自身の決定である。この手術を拒否する人でさえ、他人のためにではなく、自分自身のためにしか、それを拒否することができないのである」¹⁵。

この意見は、一見したところ、全く個人主義的である。だが、ここで、我々が注意すべきは、この意見が表明されている文脈である。フランクが指摘するように、この意見を書き込んだ者は、まさに、人々が行為決定に関する助言やサポートを求めて訪れる、チャット・グループという共同体に参加することを意図している。たしかに、この書き込みが表す意見は個人主義的である。しかし、この意見自体は、他者に語りかけたり、他者の経験や関心を聴いたり、自分の目的や価値観に対する他者の反応を聴いたりするという文脈でなされているのである。このような、行為決定が共同体参加という文脈で行われるという事態は、利他的個人主義の本質的特徴に他ならない。

また、(b)の患者に関する調査では、(a)の患者の場合よりも明確に、他者への関心が行為決定において表れられている。異常生殖器の手術を受けた子供達は、(a)の手術を受けた子供達と比べて、「恥、屈辱、強い沈黙、欺瞞」などの、自分が犠牲となったというニュアンスの言葉を残すことが多い¹⁶。これらの言葉は、自己の関心を表すものである。だが、これらは、一旦、他者に対して語られ、他者に共有されると、個人主義的なものから

利他的なものへと変貌する。例えば、6歳の時に(b)の手術を受けたマーサ・コヴェントリーは、その手術によって受けた辛い経験を述べた後に、次のように語っている。

「あなたが両性具有ならば、自分の心の言葉を聴きなさい。そうすれば、あなたがゆっくりと現れてくるはずですよ。これは、コミットメントと勇気を必要とする、怖いことです。でも、あなたが、これまでずっと、あなたの愛しい身体から創り上げてきた怪物と比べれば、それほど怖いことでもありません。あなたが自分の物語を何度も語っていく内に、ある種の変化が起こります。あなたは、今まで生きてきた、そして、これから生まれてくる全ての両性具有の人達に話し掛け始めます。あなたの強烈に個人的な物語は背景と化し、一種の超越的真理として現れ出るでしょう。自分の両性具有の声を解放するように自分自身を愛しなさい。そうすれば、我々全てが、自分の人生と祝福するに値する身体とを主張することができるようになるでしょう」¹⁷。

コヴェントリーの発言は、彼女自身を癒すと同時に、類似の経験を持つ他者に「奉仕」を行う価値を有していると考えられる。特に、「自分の両性具有の声を解放するように自分自身を愛しなさい。そうすれば、我々全てが、自分の人生と祝福するに値する身体とを主張することができるようになるでしょう」という部分は、個人的経験が共同体全体の利益に適うことを意図する、利他的個人主義を強く示唆している。

では、以上の利他的個人主義は、何を示しているのだろうか。ここで、フランクが指摘するのは、利他的個人主義を示す子供達は、外科手術をきっかけとして、混乱したアイデンティティを獲得しているということである。フランクは、利他的個人主義者として行動する子供達の多くは、自分の身体を、二重の仕方で「偽物」と感じていると分析する¹⁸。特に、この傾向は、「恥」を意味する言葉を残している、異常生殖器の外科手術を受けた子供達に顕著である。一般に、何かが「偽物」として同定されるのは、それが社会においてどのように評価されるのかに依存している。異常生殖器を持つ子供達は、手術前には、自分の身体を、社会から「健常ではない」と評価されたもの、すなわち、「偽物」として認識していた。それゆえ、子供達は、外科手術を受けたのである。だが、手術が施された後には、今度は、社会は、その手術が施された身体を、手術を受ける前の身体の「偽物」として評価するのである。子供達が示す利他的個人主義的傾向は、このような二重の「偽物」体験が引き起こす、アイデンティティの混乱を反映している。子供達は、自己の利益を考えて、外科手術を受けることを決断する。しかし、その手術は、自分の身体に関する新たな恥辱感を引き起こし、本物の身体とは何であるのか、本当の自分とは誰であるのか、とい

うアイデンティティの混乱を招いてしまう。そのような混乱を解決するために、子供達は自分の経験や意見を共有してくれる他者に関心を向けるのである。

3. サイボーグ生命倫理

それでは、外科手術がもとで引き起こされるアイデンティティの混乱という問題を解決するためには、どのような倫理が必要とされるのであろうか。この問題に対するフランクの解答は、「ハイブリッドとしてのサイボーグ的視点」を中心的なアイデアとした「サイボーグ生命倫理」というものである。

外科手術によってアイデンティティの混乱を迎えた子供達は、サイボーグ的存在者である。第一節で見たように、サイボーグの特徴は、「両立不可能なものを、それらは共に必要であり真であるという理由で、一緒に抱合している」点にあった。外科手術を受けた子供達は、二重の両立不可能性を抱合していると考えられる。一つは、手術の結果に関する両立不可能性である。まず、子供達は、手術結果に対する肯定的評価を抱え込んでいる。医療市場においては、外科手術を、病気に対する人間医学の勝利として賞賛する広告が溢れ返っている。このような社会的反応から判断すれば、手術によって身体を健常化することは、正しい選択と見なされるであろう。さらに、子供達は、手術結果に対する否定的な評価も背負っている。このことは、外科手術が新たな「偽物」としての恥辱感を子供達に与えているという事実から、明らかであろう。もう一つの両立不可能性は、道徳性に関するものである。前節で見たように、手術を受ける子供達は、利他的個人主義者として行為していた。この利他的個人主義は、利他主義と個人主義という、従来なら両立不可能と見なされてきた二つの道徳的立場のハイブリッドである。これら二種類の両立不可能性を同時に引き受けている子供達は、まさに、ハラウェイが提唱するような、サイボーグ的存在者に他ならないのである¹⁹。

このような子供達が抱える問題を解決する際に必要となるのが、「サイボーグ的視点」である。フランクによれば、「サイボーグ的視点」は、二つの仕方が必要とされる。まず、我々は、サイボーグである子供達の視点に立たなければならない。フランクは、子供達の視点に立つためには、質的研究を行うべきであると主張する。その際、質的研究者は、自分達が倫理的であるために、「サイボーグ意識」を持たなければならない²⁰。例えば、外科手術を行うべきか否かを定めるためには、我々は、インタビューなどの実地調査をして、関係者の証言を集めなければならない。このような証言には、大別して、二種類ある。一つは、外科手術の効果を説く、医師の声である。もう一つは、手術によって受けた経験を赤裸々に語る、患者自身の声である。この内、我々が証言として信頼するべきは、後者である。

手術の効果を謳う医師の声は、言うまでもなく、社会システムに制度的に結びついた人間の声である。このような声は、社会が「かくあるべし」と構成した「健常者」像に基づいて発信されている。しかし、まさに、そのような、社会が構成したカテゴリーによる抑圧によって、患者はアイデンティティの混乱を余儀なくされているのである。フランクが指摘するように、外科手術を受けた患者にとっての事実は、従来のカテゴリーを超え出たものであり、その場合には、従来の倫理や方法は、もはや適応されるべきではない。アイデンティティの混乱という問題を防ぐためには、我々は、患者がサイボーグであることを明確に意識した上で、患者自身の声に耳を傾け、それに基づいて、外科手術が行われるべきか否かを模索していくべきなのである。

第二に、子供達と対応する専門家は、相手をサイボーグとして扱うだけではなく、自分自身も「サイボーグ」として対応しなければならない²¹。フランクは、そのような専門家の一例として、生命倫理学者を取り上げている。一般に、生命倫理学者は、道德的問題を解決する際に、既存のカテゴリーの破壊と新しい境界設定という二つの作業を行わざるを得ない。例えば、患者が外科手術を受けるべきか否かという問題を考えてみよう。手術を受けた子供達のアイデンティティが混乱するのは、「健常者と障害者」や「男性と女性」といった、社会が構成した二分法的カテゴリーに子供達が押し込められるからである。それゆえ、生命倫理学者は、まず、既存のカテゴリーを批判的に検討して、破壊しなければならない。次に、生命倫理学者は、新しい境界を設定する。すなわち、生命倫理学者は、既存のカテゴリーを破壊した後、どのような種類の手術が倫理的に許されるのか、また、それはどのような条件下で行われるべきなのかといったガイドラインを定めるのである。このような作業は、旧来の社会的抑圧を取り除くという美德を有しているが、同時に、新しい境界を設定することによって、新たな「正統と異端」の二分法を作り上げ、それがもたくなって、新たな抑圧が生じうるという問題も伴っている。

専門家が、自分を「サイボーグ」として認識することは、まさに、この問題を解決する一助となる。両立不可能なもののハイブリッドであるサイボーグは、相反する契機を同時に引き受ける存在者である。このような視点に立てば、専門家は、新たな境界線を引く際に、その境界線が絶対的なものではないことを自覚することができる。たしかに、全ての二分法が、社会的抑圧に直結するとは限らない。だが、専門家は、少なくとも、二分法がそのような危険性を持っていることに対しては、敏感であるべきであろう。専門家は、常に、患者の声を聴いて、両立不可能なものを抱合することの重要性を認識し、決して新しい境界線を無理強いすることがないように、反省的な視点を持つべきなのである。

以上をまとめれば、「サイボーグ生命倫理」は、次のように構成される。

- (1) 外科手術によってアイデンティティの混乱を来した患者は、従来の「健常者と障害者」、「男性と女性」といったカテゴリーに当てはめられるのではなく、相反する契機を抱合するサイボーグ的存在者として理解されなければならない。
- (2) その理解のために用いられる方法は、患者自身の声を聴く質的研究である。
- (3) 患者と対応する専門家は、自らもサイボーグ的視点に立って患者の声を聴くべきである。アイデンティティ問題の解決は、そのような個別的証言をもとに模索されるべきであり、新たな二分法を作り出すことに求められるべきではない。

4. ケア倫理との親近性と問題点

最後に、このような「サイボーグ生命倫理」が、どのような倫理的立場として理解されるのかを検討した上で、その問題点を考察しておこう。

まず、「サイボーグ生命倫理」が、どのような倫理的立場として理解されるのかを検討しよう。前節の(2)が示すように、サイボーグ生命倫理の方法論は質的研究である。この質的研究は、(1)(3)が表すように、「専門家は、サイボーグ的視点に立って、サイボーグ的他者の視点を理解するべきである」という規範によって肉付けされている。このような特徴から判断すれば、サイボーグ生命倫理は、「治療者は、患者の立場に自分を置き、共感を通じて、対等の目線で患者と接すべきである」と主張する「ケア倫理」との強い親近性を有していると言っても、あながち的外れではないであろう。

「ケア倫理」とは、現在、医療や看護において注目されている立場の一つである。単純化を恐れずに言えば、ケア倫理とは、「他者のニーズにどのように応答すべきか」という問題に主眼を置いた倫理である²²。ケア倫理が話題となりだしたのは、1982年に、発達心理学者のキャロル・ギリガンが記した『もう一つの声』からである²³。ギリガンは、従来倫理学において支配的であった「正義の倫理」と対照的な見解として、ケア倫理を提出した。正義の倫理とは、道德の問題を諸権利間の葛藤に存するものと見なし、道德原理からの形式的思考によって葛藤の解決を求める立場である。そこでは、正義や権利に関わる普遍的原理が重視され、個々の具体的な人間関係や当事者の情感などは軽視されてきた。ギリガンは、このような立場を男性的思考として特徴付ける。それに対して、彼女は、人工妊娠中絶という道德的ジレンマに陥ったときに、女性がどのような意思決定をするのかをインタビュー調査し、その結果、女性は、普遍的原理よりも実際の人間関係の維持や調和を重視し、他者のニーズに自分がどれだけ応えられるのかという観点から、問題解決を図る傾向を持つと結論付けた。ケア倫理とは、このような、フェミニズムの視点から発展さ

せられた、受容性や関係性を重視する、文脈相対主義的な道德思考様式である。

サイボーグ生命倫理の方法論である質的研究は、他者との個別的人間関係を尊重するケア倫理と、本質的つながりを有している。例えば、発達心理学者の鯨岡峻は、介護や看護といったケアにおいて、質的研究が必要、かつ、有用であることを、実際の介護担当者や保育者による意見を引用しながら主張している²⁴。一例を挙げれば、介護の現場においては、これまでは、患者のケア・プランは、患者の行動に関する「これはできる」、「これはできない」といったチェック・リストに基づいて作成されていた。だが、介護担当者は、このようなアセスメントによって捉えられた患者像と、自分が患者との実際の関わりの中で捉えた患者像との間には、大きなギャップがあると感じている。介護担当者（と鯨岡）によれば、個々の患者に関するケア・プランを立てる際には、その患者の声に耳を傾けて、その患者の生の実相を記述する質的研究が必要なのである。このような質的研究が、従来の方法や原理を画一的に当てはめるのではなく、他者との個別的な関わりにおいて、他者のニーズに応えることを提唱するケア倫理と親近性を持つことは明らかであろう²⁵。

それでは、以上のように、サイボーグ生命倫理をケア倫理と類比的に捉えた場合、サイボーグ生命倫理には、どのような問題が指摘されうるのであろうか。サイボーグ生命倫理とケア倫理との親近性は、後者に対して指摘される問題が、前者に対しても当てはまりうることを示唆している。以下では、そのような問題の内、最も深刻なものの一つと考えられる、両者の方法論に起因する認識論的問題を指摘しておこう。

ケア倫理に対して、よく提起される問題の一つは、個々のケア行為は、一体、どのようにして正当化されうるのかということである。多くのケア理論者は、十全なケアリングはケアする側の意図だけでは保証されえないが、正しいケア行為は、ケアする側とされる側との関係だけによって、十分に同定されうると想定している²⁶。また、中には、ネル・ノディングスのように、「ケア倫理では、ケア行為の正当化は強調されない」と断言する者さえ存在する²⁷。だが、もし、ケア行為が、ケアする側とされる側との間にパーソナルな関係さえ成立していれば「何でもあり」なものになってしまうならば、アリソン・ジャガーが指摘するように、ジャンクフードばかり食べたがる子供にそれを与えることも、昔の中国人が、我が娘が世間からの評価に応えることができるように、纏足を施したことも、「ケア行為」としてまかり通ってしまうことになりかねない²⁸。

同様の指摘が、サイボーグ生命倫理に対してもなされうるであろう。質的研究においては、個々の研究対象との人間関係が重視され、研究者には、その研究対象の声をその研究対象を取り巻く文脈において理解することが求められる。このことは、質的研究における他者理解は、非常に個別的でパーソナルなものであることを意味している。それゆえ、質

的研究を方法論とするサイボーグ生命倫理においても、サイボーグ的他者を理解する場合に、「この理解の仕方は正しいが、この理解の仕方は正しくない」といったような正当化の基準は存在するのか、また、存在するとしたら、どのような形で提出されるのかといったことが、問題になると考えられる。

この問題を解決する一つの方法は、質的研究においても、その良さである個別性を損なわない程度の、何らかの一般的な正当化の基準を確保するということであろう。そのような一般性として、最も見込みがあるのは「間主観性」である。例えば、ジャガーは、ケア行為の正当化問題に関して、個々のケア行為の正当化は、ケアする側とされる側の合意だけに基づくのではなく、それ以外の人も含めて、より広く、間主観的な仕方で行われるべきであると主張する²⁹。同様に、質的研究の正当化に関して、鯨岡は、他者の理解を報告する記述が妥当であるのか否かは、常に、報告者と読み手による、その記述の再吟味によって判断されなければならないと指摘している³⁰。たしかに、質的研究の本質が、研究者と研究対象との個別的関係にある以上、個々の質的研究の正当化を、普遍的な原理に基づいて判断するわけにはいかない。それゆえ、個々の質的研究が、研究者の主観的な思い込みに陥ることを防ぐためには、できるだけ多くの他者にその妥当性を了解してもらうという形で、個別性と一般性とのバランスを図っていく他に方法はないと思われる。

ただし、このような間主観性を持ち出しても、質的研究の正当化問題が完全に解決されたというわけではない。特に、どれだけ多くの、また、どれだけ多様な他者から了解が得られれば、十分な正当化と見なされるのかは、まだまだ曖昧である。たとえ、ある時点において、ある個別的な質的研究に関する間主観的了解が得られたとしても、そのことからすぐに、その質的研究の妥当性が保証されるとは限らない。例えば、現在の日本人が纏足の正当性を考察する場合、それは正しいケア行為とは判断されない。だが、纏足が社会風習として認められていた当時の中国社会では、纏足は正しいケア行為であるという間主観的了解が得られるであろう。同様のことが、質的研究の正当化についても生じると考えられる。たしかに、間主観性に訴えて一般的な正当化の基準を確保するというのは有望なアイデアである。しかし、肝心の間主観性の程度がどれぐらい満たされていれば良いのかという点については、更なる分析が必要なのである。

5. 結論

要約すれば、サイボーグ生命倫理とは、外科手術によるアイデンティティの混乱という問題の根源を、「本物と偽物」という社会が構成した二分法に見出し、それを乗り越える手段として、サイボーグ・フェミニズムが提唱する「サイボーグ的視点」というアイデアを用

いたものである。サイボーグ的視点に立つことは、アイデンティティに混乱を来した患者自身の声を聴き、それに基づいて患者を理解するという質的研究として実行される。このような方法論を持つサイボーグ生命倫理は、ケア倫理と同様に、他者との個別的人間関係を重視した道徳的アプローチであり、普遍性や客観性を重視して個別性を軽視する従来の道徳的アプローチに警鐘を鳴らすものとして、注目に値する。ただし、個別性を重視するサイボーグ生命倫理は、質的研究の正当化をどう与えるのかという問題を不可避免的に抱え込んでおり、その解決策は、今後、より詳細に検討されていかなければならない。

註

¹ Haraway(1985). 本稿における引用は、Haraway(1991, pp.149-181)に再録されたものに基づく。

² 例えば、ハラウェイは、ラディカル・フェミニストのキャサリン・マッキノンによる「女性の本質的非存在」というアイデアを、ポストコロニアル・フェミニズムが重視する、マイノリティが持つ「差異」を打ち消してしまう理論として批判している(Haraway, 1991, pp. 159-160)。

³ Haraway(1991, p. 149).

⁴ ローテク・サイボーグについては、Hess (1995)を参照されたい。

⁵ Haraway(1991, p. 149).

⁶ Haraway(1991, p. 151).

⁷ Haraway(1991, p. 151).

⁸ Haraway(1991, p. 177).

⁹ Haraway(1991, p. 149).

¹⁰ Frank(2003).

¹¹ Frank(2003, pp. 1407-1408).

¹² これらの手術が伴いうる倫理的問題のリストについては、Frank(2003, p. 1408)を参照されたい。

¹³ Frank(2003, p. 1409).

¹⁴ (c)に関しては、患者の声は報告されていない。

¹⁵ Frank (2003, p. 1410). ただし、フランクも注意しているように、この書き込み自体が小人症の患者によってなされたという保証はない。

¹⁶ Frank (2003, p. 1411).

¹⁷ Frank (2003, p. 1411). 原典は、Coventry (1999).

¹⁸ フランクは、この「偽物」のアイデアを、ジャック・デリダに負っている(Frank, 2003, p. 1413).

¹⁹ フランクは、これらの両立不可能な要素に加えて、「どれだけの外科手術が、ダウン症の患者に施されているのか」、「生殖器に手術を受けた患者の内、どれだけ多くの人が恥ずかしくて意見を表明できていないのか」などの事実が知られていないことも、患者のアイデンティティの混乱を誘発する一要因であると指摘している(Frank, 2003, p. 1414).

²⁰ Frank(2003, p. 1414).

²¹ Frank(2003, p. 1415).

²² 川本(1995, p. 68).

²³ Gilligan (1982).

²⁴ 鯨岡 (2005, pp. 8-10).

²⁵ ただし、ケア倫理とサイボーグ生命倫理は、次の点において、意見を異にすると思われる。前者は、ケ

アが女性的思考である点を強調することによって、これまでの正義の倫理に基づいた、女性の道徳性に対する不当な評価を覆すという目的を有していた。だが、一方で、このような強調は、「女性」に関する本質主義を含意する可能性があり、逆に、ジェンダー・カテゴリーの固定化を促進してしまう恐れがある(川本, 1995, pp. 71-72)。それに対して、サイボーグ・フェミニズムの応用であるサイボーグ生命倫理では、本質主義につながる女性固有の思考という概念は、いかなる仕方でも容認されないであろう。

²⁶ この指摘は、Jaggar(1995, p. 192)による。

²⁷ Noddings(1984, p. 22).

²⁸ Jaggar(1995, p. 192).

²⁹ Jaggar (1995, p. 193).

³⁰ 鯨岡(2005, pp. 51-54).

文献

- Coventry, M. (1999). 'Finding the Words,' in Dreger (Ed.), *Intersex in the Age of Ethics* (pp. 71-76), University Publishing Group.
- Frank, A. W. (2003). 'Surgical Body Modification and Altruistic Individualism: A Case for Cyborg Ethics and Methods,' *Qualitative Health Research*, 10, 1407-1418.
- Gilligan, C. (1982). *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Harvard University Press.
- Haraway, D. J. (1985). 'Manifesto for Cyborgs: Science, Technology, and Socialist Feminism in the 1980s,' *Socialist Review*, 80, 65-108.
- Haraway, D. J. (1991). *Simians, Cyborgs and Women: The Reinvention of Nature*, Routledge.
- Hess, D. J. (1995). 'On Low-Tech Cyborgs' in Gray (Ed.), *The Cyborg Handbook* (pp. 371-377), Routledge.
- Jaggar, A. M. (1995). 'Caring as a Feminist Practice of Moral Reason,' in Held (Ed.), *Justice and Care: Essential Readings in Feminist Ethics* (pp. 179-202), Westview Press.
- 川本隆史 (1995). 『現代倫理学の冒険 社会理論のネットワークへ』, 創文社.
- 鯨岡峻 (2005). 『エピソード記述入門 実践と質的研究のために』, 東京大学出版会.
- Noddings, N. (1984). 'Caring' in Held (Ed.) (1995), *Justice and Care: Essential Readings in Feminist Ethics* (pp. 7-30), Westview Press.

〔京都大学文学研究科 COE 研究員〕